

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 24 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370086

研究課題名(和文) ブランシュヴィック、ヴァール未公刊文書研究からのフランス哲学史再構築

研究課題名(英文) Rewriting the modern history of french philosophy with the researches on the inedited texts of L. Brunschvicg and of J. Wahl

研究代表者

合田 正人 (GODA, Masato)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：60170445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：L・ブランシュヴィックとJ・ヴァールはある作家に「番犬たち」と呼ばれた。旧態然たる哲学の権威を護ることに汲々としているという意味だろうが、二人の哲学を本格的に取り上げた研究は今日に至るまでほとんど存在しない。この状況のなかで本研究は、カンでの草稿調査をも実施しつつ、ブランシュヴィックのスピノザ論が後世に与えた作用、ヴァールの哲学がレヴィナスのみならずドゥルーズにも大きく作用したことを示そうとした。

研究成果の概要(英文)：L.Brunschvicg and J.Wahl were called chiens de garde of the Sorbonne by P. Nizan. This bad image has prevented us for longtime for researching seriously on their philosophies. But were they really simple conservatives who defended the old fashioned philosophies. We don't think so at all. Under these conditions, we've tried to investigate almost all their texts including their inedited documents. As for their inedited documents, we visited the IMEC situated in Caen in order to read in particular the drafts written by J. Wahl for his lectures on Platon, M. Heidegger and so on.

研究分野：思想史

キーワード：ブランシュヴィック ヴァール 科学哲学 プラグマティズム スピノザ主義 レヴィナス ドゥルーズ

### 1. 研究開始当初の背景

従来のフランス哲学研究においては、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナスら、ドイツの現象学に大きな影響を受けた哲学者たちと、彼らの師にあたる世代の哲学者たちとのあいだに断絶を見ることが、疑われざる前提となっていた。実際、彼らの指導教授であったレオン・ブランシュヴィックやジャン・ヴァールの哲学については、それを本格的に俎上に載せて議論の対象とする試みは残念ながらこれまで日本とフランスのみならず世界を見渡してもほとんど存在しなかった。

そのため、例えばレヴィナスの博士号請求論文『全体性と無限』の指導教官がヴァールであったことの意義も解明されることはなく、なぜドゥルーズがサルトルという例外を除くとフランスで最も偉大な哲学者はヴァールであったと述べたのかという問いが真剣に立てられることもなかった。更に、カヴァイエスのような数理哲学者にしてレジスタンでもあり、かつスピノザ主義者を自称する人物がブランシュヴィックのある意味では後継者として生まれたこと、そのような思想史の動きが焦点化されることもなかった。これが本研究開始時の偽らざる現状であり、本研究を促す背景であった。因みに報告者はメルロ＝ポンティを研究する過程で、今から35年前にブランシュヴィックを取り上げたことがある。本研究は長い空白を経て再びこの研究を再開せんとするものでもある。

### 2. 研究の目的

(1) 上記のような事情を踏まえて、報告者は何よりもブランシュヴィック、ヴァールという二人の哲学者の「哲学」がいかなるものであったか、その全体像にできる限り迫ることを企てた。

(2) そのうえでブランシュヴィックのスピノザ論が例えばカヴァイエスの数理哲学、メルロ＝ポンティの知覚の現象学にどのように作用していたかを示そうとした。

(3) 同時に、今度はヴァールの博士号請求論文『英米の多元主義的哲学』に目を向け、それがレヴィナスとドゥルーズという、ある意味では対極に位置するような二人の哲学者の極めて重要な参考文献であったことを示そうとした。

(4) 加えて、ヴェールの親族と接触し、いまだ不分明な部分を多く有したヴァールの生涯について情報を得ることを課題とした。

### 3. 研究の方法

(1) ブランシュヴィックにせよヴァールにせよその著作は、今日それらを手に入れること自体が非常に困難である。パリのフランス国立図書館でそれらを読覧するのに加えて、何よりもまず、これらの著作を手に入れるよう努める。

(2) 誠に情けない現状であるが、両哲学者のそれらの著作は、端的に「読まれていない」

というのが現状である。決して少なくはない彼らの著作の精読を企てること。

(3) そのうえで、とりわけヴァールの未公開文書の調査を試みる。これらの文書はカンのIMECに蔵されており、その文書館での調査をおこなう。

(4) ヴァールには三人の娘があり、特に三女バルバラさんがイタリアのアオストで暮らしておられ、時に、父親の未公開文書を好評なさっている。この方と何とか連絡を取り、ヴァールについての情報を得るよう努める。

(5) 報告者はドゥルーズとレヴィナスをめぐる共同研究に加わっているが、そのような場を活用して、研究の成果を発表する。

### 4. 研究成果

(1) まず、ブランシュヴィックとヴァールの著作について、まだ完全とは言えないが、ほぼその蒐集を果たすことができた。

(2) それらについて、報告者なりにほぼ精読を終えることができた。特にブランシュヴィックの『数理哲学の諸段階』、ヴァールの『英米の多元主義的哲学』『形而上学概論』の読解は極めて多くのことを申請者に教えてくれた。

(3) ブランシュヴィックのスピノザ論を分析することで、「知覚」という主題がいかに生成したかを示し、それがメルロ＝ポンティの「知覚の現象学」を可能にしたとさえ言えるのではないかと仮説を公表することができた。ブランシュヴィックの『エチカ』解釈が、メルロ＝ポンティにおける「知覚野」を可能にしたというのは申請者自身にとっても予想外の帰結であった。

(4) ブランシュヴィックの博士号請求論文『英米の多元主義的哲学』をドゥルーズとレヴィナスがどのように読んだかを示し、更にそこから、ドゥルーズとレヴィナスとの連関を主題とする発表を内外でおこなうことができた。「と」という接続詞で示された、例えばウィリアム・ジェームズの描く多元的世界ならびにジェームズの言う「ラディカルな経験論」が、一見すると正反対の立場に立つかに見えるドゥルーズとレヴィナス双方によって摂取され、更にそこに、フランツ・ローゼンツヴァイクのような哲学者が「根源語」として挙げる「と」(und)の問題が重ね合わされるのである。

(5) その過程で、ドゥルーズとレヴィナスにおける「リズム」という主題を見出すことができた。ヴァールはそのホワイトヘッド論などで「リズム」の観念を提起している。レヴィナスは戦後の諸論考から「リズム」ないし「リズムの不在からなるリズム」の観念を提起し、1948年の「現実とその影」でイメージの音楽性を語り、リズムの恐ろしい力を指摘したレヴィナスは、第二の主著『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』でも、「不整脈」という語彙でその哲学を語っている。ドゥルーズもまた

『差異と反復』ですでに「拍」と「リズム」の問題に言及し、「多リズム性」「横断リズム性」の観念を提出している。そしてそこに、アンリ・マルティネのリズム論が作用することになるのだが、興味深いことに、ドゥルーズのみならずレヴィナスもマルティネに着目していたのである。

(6) バルバラ・ヴァール氏と連絡を取り、アオストに氏を訪ね、ヴァールに関する貴重な資料を入手するとともに、ヴァールの人生についての得難い証言を得ることができた。そこにはヴァールが収容所のなかで綴った文書、彼自身が娘に手渡した家系図なども含まれている。バルバラ氏はレヴィナスの教え子でもあり、ヴァールとレヴィナスとの知られざる関係、更にはヴァールの夫人などについても口頭で様々な情報を得ることができた。

(7) カンの IMEC での文献閲覧の許可を得、二度そこに滞在して、ヴァールの未公刊文書、特にその講義草稿を閲覧することができた。それを通じて、ヴァールのプラトン講義は、そこに出席していたであろうレヴィナスのプラトン解釈に多大な作用を及ぼしたのではないかと、との感触を得ることができた。また、ハイデガーをめぐる講義では、ヴァールがゲストとしてレヴィナスを呼ぼうとしていたこと、そこで何が争点となっていたかを知ることができた。また、ヴァールがハイデガーのドイツ語の語彙にあてたフランス語の訳語についても、多くのことを考えさせられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

合田正人、リクールとデリダ 「隠喩」論争が拓いたもの、査読有、『リクール読本』(法政大学出版局)、査読有、2016、pp.104-122

合田正人、ハンス・ヨナスの生命哲学と心身問題、『京都ユダヤ思想』、査読無、第6号、2016、pp.125-143

合田正人、「肉」と「器官なき身体」、『メルロ＝ポンティ研究』、査読有、第19号、2015年、pp.70-84

合田正人、ミシェル・アンリにおけるスピノザの蝕、『ミシェル・アンリ研究』、査読有、第5号、2015年、pp.15-28

〔学会発表〕(計 6 件)

合田正人、科研費：ドゥルーズ研究の国際化拠点の形成、Arythmie の哲学 レヴィナスとドゥルーズ、2016年12月23日

合田正人、立命館大学哲学会(招待講演)《リズム》で読み直す近現代思想 ピンヤから現代まで、2016年11月13日

合田正人、Levinas'Summer Seminar (organised by Prof. Richard Cohen), Rhythm and Sense in the Philosophy of Levinas, 2016年7月12日

合田正人、デリダ没後10年記念シンポジウム(早稲田大学) 縁から淵 ジャック・デリダとジル・ドゥルーズ、2014年11月25日

合田正人、Societe internationale de Recherches Levinasiennes, Eternel retour d'il y a, 2014年7月1日

合田正人、Deleuze International Society, New Introduction to the Problematics of Archipelagos, 2014年6月6日～6月9日

〔図書〕(計 5 件)

合田正人、他、書肆心水、『共にあることの哲学』、2016、284頁

合田正人、他、書肆心水、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』、2016、384頁

合田正人、法政大学出版局、『フラグメント』、2015、580頁

合田正人、河出書房新社、『思想史の名脇役たち』、2014、285頁

合田正人(編著) 他、知泉書館、『顔とその彼方』、2015、239頁

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 合田正人(GODA Masato)  
(明治大学文学部専任教授)

研究者番号：60170445

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )